



紙芝居の後はクイズも

子どもの米離れに関しては本当に心配しています。誤ったダ

農業のことを皆さんにもっと知ってもらいたいということで、様々なイベントにも参加させていたでいます。その一つとして、昨年の秋に市街地周辺で行われたサンクスフェスティバルで、お米に関する紙芝居を披露しました。お米ができるまでの過程や、栄養分の話などをまとめたものだったんですが、子どもやお母さんたちにすごく人気があって、読む方も力が入りました。こんなに反響があるとは思わなかったですね。

農業もPRの時代に

現在は男女共同参画の時代。農村で生活する女性も地域社会や方針決定の場へ参画しているというところで、農村生活アドバイザーの仕事も変わってきています。市内のメンバーは現在8人。専業農家の女性ばかりで本業も忙しい中、時間を調整して、みんなで協力しながら様々な活動をしています。

研究・勉強の日々

きゅうり栽培を始めて30年。夢中でここまで走ってきました。今までも苦労はありましたが、現在の農業経営は本当に大変。昔のように作れば売れるという時代ではありません。これからは、常に消費者のニーズを把握しなければ。現在、減農薬農法により、安全で安心して食べられる作物を作るよう心がけていますが、とにかく日々研究、勉強。これからは作ることだけでなく、売ること自分たちで考えないと生き残っていきません。



農業のすばらしさを アピールしたいですね。 女性も地域社会へ 出て行かないと。

あさおか あさこ
浅岡安佐子さん(根崎町)

平成8年から県の認定を受けて「農村生活アドバイザー」を務める。夫の弘一さんとともにきゅうり専業農家を営んで30年。

わたしもはつらつ50歳！

様々な分野で活躍する昭和27年生まれの皆さんにお話を伺いました。
仕事への思い、そしてこれからの安城市は？

はつらつ
50歳
インタビュー

未来の安城を創るのは 若い力。 若い世代のリーダー シップに期待します。

こんどうふみ お
近藤文男さん(大東町)

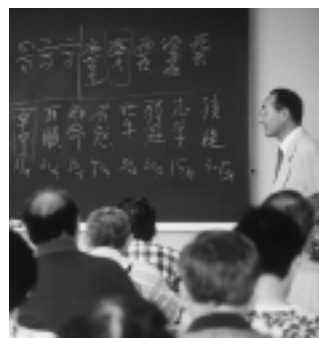
生涯学習ボランティア「はっちの会」代表。
ほかに公民館講座講師、キャンプカウンセラー、安城文化協会世話人などを務める。



昭和50年から6年間、青少年の家で行われている青年大学の講師を引き受けたのがきっかけで生涯学習ボランティアを始めました。昭和52年から市民会館まつりの司会を務め、もう25年になります。また、昭和59年から公民館講座などで冠婚葬祭の講座を受け持ち、19年間で236回を数えました。

お年寄りからパワーを

最近、高齢者教室や老人クラブからお呼びがかかります。お年寄りは元気ですね。質問がどんどん出て、活気にあふれた講座になり、やっていてとても楽しいです。逆に、若者向けの講座で話をすると、反応が薄いのが気になります。若い世代にもっと元気が欲しいですね。



大盛況の冠婚葬祭講座

臨終正念の気持ちで

これからは、今まで以上に「今日」を大切にして生きていこうと思います。今日死ぬかもしれないと思えば、今、このときを一生懸命がんばる。「臨終正念」の気持ちを持って1日1日を過ごしたいと思っています。

また、子ども教室で、毎年子どもたちを連れて鳳来寺山に登りますが、年々子どもたちの体力が落ちているのを感じます。テレビゲームなどの影響で、外で元気よく遊ぶことが少なくなっただけでしょうか。遊ぶ場所自体も減っていますよね。昔は、明治用水で泳ぐことができ、夏になると大勢の子どもが集まりました。今は緑道としてきれいに整備されましたが、そういう場所がなくなるのは少し寂しいですね。



はつらつ 50歳 インタビュー



できることから とにかくやってみよう。 引っ込み思案の私が 出した結論です。

こ だまひろ こ
小玉博子さん(榎前町)

環境美化ボランティア「クリーンロード榎前」
のメンバー。毎月第3日曜日に国道23号沿線
の清掃奉仕を行っている。



盲人通院介護も行っています

昭和59年に市のホームヘルパーのパート職員に応募したのがこの仕事を始めるきっかけでした。その後、平成6年に正式に市社会福祉協議会の職員になりました。

最初にヘルプに付いた人のことは今でもよく覚えています。当時、ヘルパーは自転車で移動していました。その日は台風で、お宅へ伺うことが難しかったので、お休みさせてもらったんですね。そうしたら相手にすごく怒られたんですよ。悪天候のときにご助けが必要なのになぜ来てくれないんだって。そのとき、「ああ、この仕事はそういう仕事なんだ」と強く感じました。

ありがとうがうれしくて

身体介護と家事援助が主な仕事です。身体介護でお風呂に入れたり、体をふいたりするのは腰などに負担がかかり、つらいです。でも、大変なのは、実は家事援助なんです。各々の好みに合わせて部屋を掃除したり、

食事を作ったりするのは本当に気をつかいます。その日の気分で味付けの好みが変わる人もいらっしゃるんですよ。それに対応しなければいけないので、精神的ストレスは相当なものです。でも、つらいことばかりではありません。うれしいこと、楽しいこともいっぱいあるんです。徐々に心を開いて昔の安城の話をしてくれたり、「ありがとう」と言葉をかけてもらえたりすると、本当にうれしい。「ありがとう」と言ってもらえる仕事ってなかなかないじゃないですか。そんなときにやりがいを感じますね。この仕事は好きじゃなければできません。人のために働いているのではなく、自分のためにやっているんだと思わないと続かないと思います。

一歩踏みこんだ福祉を

これからの安城市には、もっともっと福祉に力を注いでほしいです。まだ一歩遅れていると思うこともあります。新しいことにも積極的にチャレンジするまちであってほしいですね。個人的には健康でいることが何よりも大事。昼神温泉からくんで来るおいしい水を飲んで、レジャー農園で作る新鮮な野菜を食べて、たまに温泉に入ってリフレッシュ。これからそんな生活が送れたらいいですね。

新しいことにいち早く チャレンジする。 そんな安城市であって ほしいですね。

いちかわじゅんこ
市川順子さん(東栄町)

市社会福祉協議会のホームヘルパーとして長
年従事。常勤ヘルパー16人のうち最長のキャ
リアを持つベテラン。



毎月清掃奉仕を行います

昨年10月に、市のアダプトプログラムに参加する団体として、地元有志で「クリーンロード榎前」を結成しました。「アダプト」とは「養子」のこと。アダプトプログラムというのは、一定の区画を自分の子どもとみなして、定期的に清掃して面倒をみようという活動なんです。わたしたちの養子は、国道23号の和泉インターから高棚町井池交差点までの区間。8人のメンバーで毎月第3日曜日の午前8時から1時間、清掃を行っています。

きれいにする爽快感

わたしはすごく引っ込み思案で、集団の中で行動することも苦手なんです。でも、様々なボランティア活動についての話を聞く機会が増え、自分も何かやりたいとずっと思っていました。そんなときに、お友達から「清掃ボランティアと一緒にやってみない」と声をかけられ、思い切って参加してみることにしました。これならわたしにもできるかなと思っただけです。活動を始めたころはすごく大変で、嫌だなと思っただけもありました。でも、きれいになった道路を見たときの爽快感が忘れられなくて。

国道23号は車の通日も多く、ごみが多いなとは思っていましたが、清掃活動を始めて、改め

てごみの多さを実感しました。1回の清掃活動で25袋分ぐらいのごみが出ます。特に交差点周辺はひどいですね。ゴミ問題を根本的に解決するのは難しいですが、結局は一人ひとりのマナーの問題だと思っんです。清掃をしている横で、紙おむつを捨てていった人がいるという話を聞いたことがありません。また、拾ってくれる人がいるなら、捨ててもいいじゃないかという考えの人もいるようです。びっくりしますよね。

とにかく行動を

わたしたちが毎月1回活動を行うぐらいではなかなかごみは減りません。でも、わたしのように、何か行動を起こしたくても、引っ込み思案でなかなか行動に移せない人がまだまだたくさんいるはずです。そんな人たちの参加により活動の輪が広がることを願っています。